

宗教とは何か（2）今井館聖書講義（2）

2. 隠れたところにおられる父 — イエスの宗教観 I

(1997年2月16日)

讚美歌 294、271

聖書 マタイによる福音書 6：1－18

「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。

だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。……」

「断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。あなたは、断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」

まえおき

宗教というと、ふつう私どもは「神・仏」を考えます。本居宣長は「およそ、あやしきもの、もの古りたるもの、これを上という」と言っていますが、どのような文化も「神」に当る言葉を持っているようです。人間は昔から何か人間を超える存在があることを感じ、これを恐れる心があったことがわかります。

そこで今回は、宗教における「神」の問題を考えてみたいと思います。

聖書は直接的に神の存在を主張したり、神を定義するようなことはしませんが、神はいかなる存在であるか（神の属性）については実に明確に語っています。「初めに、神は天地を創造された」（創世記 1・1）という聖書劈頭の言葉などはその典型でしょうが、その中でも今朝取りあげるイエスの神の説明（神観）は実に絶妙と言うべきだと思います。

イエスの宗教観

前回申しあげたように、こんにち私どもの持っている新約聖書は執筆年代によって編纂されたものではなく、実際はパウロの真正の手紙と思われる7通がまず書かれました。その次に（恐らく紀元60年代後半）現れた文書が「マルコによる福音書」です。これは手紙ではなく、平たく言えばイエスの伝記のようなもので、「イエスはキリスト、神の子なり」という信仰告白を、断片的な「イエス伝承」を用いて一貫したイエスの生涯の物語に仕立てたものです。ヘレニズム世界の「伝記」文学を発展させて、「福音書」という独特の物語形式を造形したと言われます。そしてこの「マルコ」を基にして、さらに「マタイ」「ルカ」の福音書が生まれました（いずれも80年代）。

「マタイによる福音書」はイエスの言説がいくつかにまとめられていることを特徴としますが、その最初のものが有名な「山上の説教」（5－7章）で、今朝はその一部（6：1－18）を読むわけですが、この中で「主の祈り」（7－15）の部分は私どもの文脈からはずれているので省略することにします。

この箇所は、1節が全体の命題、そのあと施し（2－4節）、祈り（5－6節）、断食（16－18節）という三つの例が挙げられています。これら三つの事柄はいずれも宗教といわれるものに欠くことのできない要素をなしています。貧しい人、困っている人を助けようとしなない宗教はないし（施し）、神であれ仏であれ、人間を超える存在に祈りをささげない宗教はない（祈り）、さらに断食に限らず何らかの宗教的修練・修養をしない宗教はありません（断食）。そこで私は、この箇所はイエスが宗教というものをどう考えておられたかを示すものと理解したいと思います。言いかえれば、これはイエスの「宗教観」であると言ってよいでしょう。

それではイエスの宗教観はどのようなものでしょうか。それは「見てもらおうとして、人の前で善行をしない」、施しをするとき「右の手のすることを左の手に知らせない」、祈るとき「奥まった自分の部屋に入って戸を閉めて祈る」、断食をするとき「頭に油をつけ、顔を洗う」、それが本当の宗教行為だということです。宗教行為は、それが何であれ、人に見せるためのものではない。「人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくため」に為すべきものである、ということです。

言いかえれば、イエスの宗教観によれば宗教とはどこまでも“a private matter”（個人的な、自分に関する事柄。これは4節の「人目につかせないためである」に当たるTEV（Good News Bibleの訳）であるのです。それをおおっぴらのことにしてしまえば、それはもはや宗教ではないのです。そのようにする人を、イエスは「偽善者」と呼んで厳しく批判されたのでした。

ところで、人々が一般に抱いている宗教に対するイメージはどのようなものでしょうか。人は宗教というと、まず建物を思い浮かべるようです。神社、仏閣、教会堂など。次にそこに住む宗教専門家、すなわち神官、僧侶、神父・牧師など。これら聖職者と一般信徒とをもって構成される組織と制度、それに教義や教規など。そして宗教といえば、どうしても祭儀、儀式、習俗などを考えないわけにはいきません。

これらのものは、いずれも宗教を構成する大切な要素ではありますが、決して宗教の本質ではありません。私はこれらによって成り立っている宗教を「文化の一領域としての宗教」と呼ぶのですが、そしてそれは決して無意味でも不要でもないと思いますが、少なくともイエスの宗教の範疇には全く意識にも上ってきませんでした。イエスはおよそ世の「宗教」とは違った領域、異なった秩序のことを考えておられたのだと思います。

イエスの神観

宗教はどこまでも「私のこと、個人的な事柄」である、とするイエスの宗教観の、その根拠はどこにあるのでしょうか。それはイエスの神観に基づくものです。イエスはここで神を「天におられるわたしたちの父」（9節）と呼び、その父は「隠れたところにおられ、隠れたことを見ておられる」（6、18節）方だと言っておられます。神とはそういう存在だということです。これがイエスの「神観」です。（「父」についても、多くの語るべきこと（とくにその文化的内包）がありますが、きょうは省略いたします。）

ここで少々言葉のことに触れますと、この箇所「隠れた」という語が6回出てきます。日本語の聖書（新共同訳）では、これが「人目につかせない、隠れたこと、隠れたところに」と3通りに訳し分けられています。原語ではすべて同じ“en to krypto”で「隠れたところに」という副詞句です（前田護郎訳（『新約聖書』中央公論社）は、6か所とも全部同じに「隠れたところに」とうまく訳出している）。「秘密のところ、見えない領域で」、さらに「心ひそかに、本質的に」というような意味をもつ言葉です。私たちは神を定義したり、説明したりすることは出来ない。しかし、もし神はどのような方かと人間の言葉で言うとしたら、恐らくこのイエスの言葉にまさるものはないでしょう。神は「隠れたところにいます」、そして「隠れたところに見たもう」（前田訳）方である。これが私どもの「父なる神」であります。

いま申しましたように、「隠れたところに」という語は副詞句で、これは **kryptos** という形容詞に前置

「人々の隠れた事柄」（ローマ2・16）、「闇の中に隠されている秘密」（コリント1の4・5）、「心の内に隠していたこと」（同14・25）、「卑劣な隠れた行い」（コリント2の4・2）、「内面的な人柄」（ペテロ1の3・4）。これらの例をよく読んでみますと、一見いかにも単なる道徳訓のように見えますが、決してそのような浅い言葉ではなく、実は人間存在の根底を明らかにした深い言葉であることがわかります。

その言うところは、人間はみなひとりひとり「隠れた事柄、心の秘密」をもっているということ、「内面的な人柄（かくれた内なる人—協会訳）」こそが人間存在であるということです。隠れたところにいます神は、その息（霊）を吹き入れられて（創世記2・7参照）、人にもまた「隠れたところ」をつくられたのです。（スーターのギリシア語辞典（A. Souter “A Pocket Lexicon to the Greek N.T.”）とは、これに **the inward nature (character)** という訳語を与えています。）これを「魂」と言い、「心」と言い、あるいは「秘密」「内面」その他何と呼ぼうと、このようないわば「心の奥殿」「靈魂の聖所」をもっていること、これを措いて人間が人間であるゆえんのものはないのです。これこそが人間の尊貴、人間存在の価値、人間の生命の重さの淵源であり、根柢なのだと思います。

霊なる神は「わたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられる」（ヤコブ4・5）言いかえれば、隠れたところにおられる神は、わたしたちの「内面的な人柄」に絶えず愛の呼びかけをしておられる。これに対して、わたしたちもまた心の秘密を開き、靈魂の聖所の幕を上げて、隠れたところに見たもう神に全身全霊をもって応える。これ以外にまことの宗教はない、少なくともこれ以外に宗教の本質はないのです。この秘儀を明らかにした森有正のこトバをご紹介します。

人間というものは、どうしても人に知らせることのできない心の一隅を持っております。醜い考えがありますし、また秘密の考えがあります。またひそかな欲望がありますし、恥がありますし、どうも他人に知らせることのできないある心の一隅というものがあり、そういう場所でアブラハムは神様にお眼にかかっている。そこでしか神様にお眼にかかる場所は人間にはない。人間がだれはばからずしゃべることのできる、観念や思想や道徳や、そういうところで人間はだれも神様に会うことはできない。人にも言えず親にも言えず、先生にも言えず、自分だけで悩んでいる、また恥じている、そこでしか人間は神様に会うことはできない。（「アブラハムの信仰」『土の器に』（日本基督教団出版局）から）「エン・トゥ・クリユプトゥ」の神と、人の「タ・クリユプタ」と。人のタ・クリユプタを、エン・トゥ・クリユプトウの神のほかには誰に「見てもらおう」とするのか。自分さえも知りえないこの人間存在の深みを、なぜ「人目につかせ」ようとするのか。人に見せるべきはずのものではないではないか。「それは、人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである」（18節）。まことに、イエスの私どもに対する熱い愛が、私どもの隠れたところに激しく、

静かにしみ入ってくるような彼の言葉ではありませんか。

畏れと慎みと優しさ

それでは、このような「宗教観」（もっと端的に言えば、信仰）はどのような靈性（信仰の徳）を生むか、それを3つ挙げてみます。

第一は「畏れ」です。人間を超えた存在に対する畏れ、畏怖の念、神の前に肅然となることです。

日本でも昔は「誰も見ていないからといって、わるいことをしてはいけない。お天道様が見ていらっしゃるのだから」と言って、子供をしつけたものでした。こちらからは決して見えないが、自分はいつもある存在に見られている。人間にはそうした世界、「隠れたところ」、見えない領域がある。それを知るところに恐れがある。これは非常に素朴ですが、人間にとってとても大切な感情です。

聖書もまた「神は人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる」（ローマ2・16）と言って、人の「タ・クリユプタ」が神に知られることは、実は人の罪が明らかになることを示しています。神は裁きの神であり、畏るべき存在です。

現代はおよそこの畏れを知らぬ時代です。現代人はこわいもの知らずであり、人には「隠れた世界」があるということなど考えようともしないのではありませんか。そして今や、人間は畏れを失って自滅しようとしているのではないのでしょうか。

第二は「慎み」ということです。畏れを知る者は慎み深くならざるをえない、「内面的な人柄」を自覚する人間は謙虚にならざるをえないのです。

聖書にしばしば「慎み（深い）」と訳されている *sophron*（派生語も含めて）という語があります。先程のスターの辞書には *soberminded* という訳語があがっています。「酔っていない、しらふである」、そこから「分別のある、思慮深い」などの意味ももつようになった語のようです。「慎み」という日本語は少々消極的な性質を感じさせますが、私はむしろこの語は「現実を明晰に直視し、もの事の本質を洞察し、状況を熟慮して、それに正当な判断を下しうる落ち着いた心の状態」を言うものだと考えます。

いみじくもバブルと言ひ、いままたそれがはじけたと騒ぎまわっている現代は、思慮も分別もなく狂気に酔い痴れている時代だと言うほかありません。

その中で宗教こそは人をしらふに立戻らせる生命であり力であるべきなのに、悲しいことにその「宗教」が人に「慎み」を忘れさせるのです。「宗教」こそが人を絶対化に誘うものだからです。私ども自身がよく知っているように、信仰者は何かというと神とか、信仰とかという絶対的価値をもち出して、自ら絶対者のように振舞う。世の中で信仰者ほど凶々しく、慎みのない人間になりやすいものはないことを、よく

よく心得ていなければならないと思います。

第三は「優しさ」です。「隠れたところにおられる」存在は、確かに私どもの中に畏れ（の感情）を生みますが、同時に、それは私どもにいついかなる時にも自分を見ていてくれる存在（永遠の目）があるという大きな安心を与えてくれます。「内面的な人柄」の自覚は、この「永遠の目」との関係においてのみ来たるものであり、その自覚は私どもに深い平安と、大きな喜びと、豊かな自足感とをもたらしてくれます。その時私どもはもはや他人の目を気にしないばかりか、自分で自分を裁くこともしない。「今やキリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」（ローマ8・1）から。

この確信に合わせて、「内面的な人柄」の自覚が、自分の隣人もまた、その人がどのような人であれ、自分と同じく「内面的な人柄」をもつ人であることを確信させます。

この両様の確信こそが、人を本当の意味で「優しく」するのではないのでしょうか。優しさとは、それゆえに、互いの尊敬であり、互いの思いやりであり、互いを容れあい、互いを思う寛容で繊細な心です。

人間の価値を「内面的な人柄」によるのではなく、ただ外に現れた見える能力だけで評価してしまう現代人は、当然のことながら急速に優しさを喪失しつつあります。そして自ら過剰と豊満の中の飢餓地獄に陥りつつあるのを知らぬかのようです。

おわりに

もしこの時代に救い（真の宗教）があるとすれば、それは私どもひとりひとりがこのような霊性を生み出すことを可能にする生命に生きるほかはありません。そしてイエスこそ「隠れたところにいまして、隠れたところに見たもう」神を私どもに顕して、その生命を与えて下さったのだと信じるものです。

（所載）『聖書は語る－今井館日曜聖書講義－第2号「宗教とは何か」1997・1－3』

1998年8月